

## 影なる王女



## 第八章

荒々しく吹きすさぶ北からの風が、目が見えぬほどに黒髪を乱し、波頭が岩に碎け、塩を含んだ水飛沫を数十丈の高みまでまき散らし、崖に腰掛けた乙女の白い膝を湿らせた。十歳を一つか二つ、越えたばかりか。髪を垂らして額に白布を巻き、白づくめの衣をまとって帯は紅色。勾玉を首に掛け、手には笹竹。ふつくらと幼さを残した貌に細長く伸びた眉、黒目がちな小さな眼に、泥をつまんだような小さな鼻。頬は寒風に赤く染まっている。

眼前に広がる海を眺めながら、乙女はなにやら口ずさんでいた。この地の言葉ではない。旅を重ねるうちに同行の男が教えてくれた、海の彼方の韓の謡……。

「飯豊よ、ここにいたか」

振り返れば、ほっそりとした長身、髪をうなじのあたりで束ねた三十路の男が、右の脚をひきずるように、息を切らせ、尖った巖を避けつつ昇ってくる。

飯豊と呼ばれた乙女は、軽く微笑み、近づいてくる男を見つめた。

「何か聞こえるか」

並んで腰を下ろし、息を整えながら男は問うた。

この乙女は、確かに常人には聞こえぬ音や声を、聞き分ける能がある。海のうねりと、

風のざわめきの中から、何かを感じ取る能が。

飯豊は首を振り、眼差しを海に向けた。

「満智の国は、この海のはるか向こうにあるのだろうか」

鈴の鳴るような、心地よい声だった。この声だ、と満智は思った。際だって美しいわけでもない十二歳の乙女を、里人も、邑長も、否、この国の王までが敬い従うのは。

「然り」

満智は腰に提げた竹筒の水に口をつけ、応えた。飯豊は重ねて問うた。

「帰りたくはないのか」

「帰ったところで、親も家もない」

満智は乙女の小さな肩を軽く叩いた。

「飯豊と旅をするほうが、楽しい」

「吾はしばらく、ここに落ち着く」

飯豊は海を見つめながら言った。

「王が、吾と満智のため、家を建ててくれると言った」

「では飯豊は、高志の民になるのか」

「それは決めていない」

飯豊は立ち上がった。

「高志の民が、吾がここに在ることを欲すれば、吾はここに在る。行けと言われれば、行

く。吾の決めることではない」

「この吾が決めることでもない、か」

満智は飯豊を見上げ、やや唇を歪めて問うた。

「否、満智が決めてもよい。ただ……」

飯豊は膝を折り、満智に寄り添うようにしやがんだ。

「しばらくは、吾とともに居てほしい」

満智が、生まれ育った邑を出たのは十七年前。海を渡って攻め寄せてきたヤマトの軍に、里を焼かれ、一族を殺されたときであった。性は猛々しく、好色で、家の掟にも村の掟にも従わなかった彼は、殺された一族や荒らされた邑に、一日悲しみの涙を流した後は、解き放たれた鳥のような心地で旅に出た。

ヤマトの軍は、女兵が多かった。満智は、邑でいちばんの美まし男と言われた。ヤマトの女兵たちは争って彼をまぐわいに誘い、いつしか満智は、女兵軍と行動を共にした。

やがて女兵軍は、降伏した韓軍の罠に陥り、宴の席で毒を盛られ、悉く殺された。満智は逃げた。各地で撃破され、逃げ帰るヤマト軍に潜り込み、海を渡った。満智の乗った舟は嵐に遭い、筑紫の浜に打ち上げられた。

それから十七年。満智はさまざまな邑を渡り歩いた。邑の女を手なづけ、その家に収まり、やがて諍いを起こし追い出される。その繰り返しであった。

飯豊と出会ったのは二年前。ある邑の長の娘とまぐわい、その娘に懸想していた若者数名に待ち伏せされ、右の膝を砕かれた。

杖を頼りに邑をよろばい出た満智は、やがて力尽きて倒れた。

倒れた満智を介抱したのが、飯豊だった。

彼女は、重い軀を引きずって、満智をある邑まで運んだ。五軒ほどの家が寄り添うように集まった寒々しい邑は、その一ヶ月ほど前、疫病のために悉くが死んだ。ただ一人、生き残ったのが飯豊だった。

やがて満智は恢復し、飯豊の親たちが残した穀物の蓄えが尽きるとともに、二人して邑を出た。

二日歩いた後、ある邑に着いた。

おおぜいの若者たちが、武器を手に提げて広場に集まっていた。隣の邑と戦をするという。邑の田を潤す河の流れを、隣邑の者たちが無断で変え、彼等の田畑に水を引こうとしたためであった。

「待て」

殺気だった邑人たちの間に割って入ったのは、飯豊だった。不思議なことに、さして大きくもない彼女の声に、邑人たちは口を噤み、耳を傾けた。

隣の邑にも言い分があるう、吾が聞いて、話してくる。

そう言い放った飯豊は、邑の若者に案内を頼み、翌日、隣邑から戻って来た。

隣邑の田畑を潤していた池が日照りで干上がり、このままでは邑中悉くが死ぬ、そう隣邑の長は言った……。

飯豊の言を聞いた邑人どもは、口々にわめいた。ならば、彼等はなおさら水を返そうとはすまい、ならばやはり攻めよう。騒ぎ出した邑人たちを、飯豊は両手を大きく広げて制止した。

汝等、戦を仕掛けるにも、あと五日待て。満智よ、汝は吾とともに隣邑へ……。

飯豊の毅然とした声音に、邑人は武器を納めて家に帰り、満智は飯豊に従って隣邑に赴いた。

途中、飯豊は問うた。満智は天文を見ると言ったな。

確かに彼には、雲や星の動きから、天候を予測する才があった。韓にいたおり、天文を読む博士の娘とまぐわい、彼女を通じて天文を学んだのだ。

ならば、あと幾日、日照りは続くか。

天文を読むまでもない、と満智は応えた。あの山の上の雲を見よ。早ければ明日には雨が降る。

雨が降って、隣邑の池が水で満たされれば、戦は避けられるか？

今は避けられても、また日照りになれば、争いもまた起こる。

争いを永く避けるには、如何すればいい。

隣邑が新たな水の源を見つけるか、あるいは日照りに強い作物を植えるしかあるまい。

そうか。

飯豊は眼を輝かせ、それを聞いて如何する、面倒には巻き込まれたくない、と言ひ募る満智には耳も貸さず、歩みを早めた。

隣邑では、柵を築き、弓を張つて戦に備えていた。飯豊はまっすぐに長おさの家に向かった。満智は、邑の入口で待った。邑同士の諍いは、珍しいことではない。よそものが首を突っ込んで、どうなるものでもない。下手をすれば双方の恨みは、よそものに向けられる。よそものは、歓迎されるべき異人まればいであり、定まった地に住む者の鬱憤晴らしの対象にもある。その危うさを、満智はよく心得ていた。

だが、満智は信じられないものを見た。

邑長むらおさの家から出てきた飯豊は、訝いぶかしがる邑人を引き連れて広場に至り、臥して地に額をつけ、一心不乱に祈り始めた。

日が傾き、夜となつても、飯豊は祈り続けた。細い背を見せて地に臥す彼女の周囲を、篝火を手にした邑人が幾重にも囲んでいた。

夜が明けた。邑人たちが疲れ切つて家に戻つても、飯豊は動かなかった。

やがて日が沖ちゆうてん天に昇り、じりじりと地に在るすべての生き物を灼いた。邑人たちは不安げに空を見上げ、水も飯も口にせず、呪しゆを唱えつづける乙女を見つめた。

突然、どよめきが起こった。雲が、にわかには黒みを帯びて空いっぱいには広がって日を覆い尽くし、雷鳴とともに、水の粒が降ってきて、激しく大地を叩いた。

「飯豊！」

久しぶりの慈雨に狂喜する邑人をかき分けて、満智は、力尽きて倒れた飯豊に駆け寄り、抱き上げた。

雨が上がった後、邑人たちは潤った田を耕しに散った。長の家で目覚めた飯豊はこう言つた。

「日照りに強い木の実を多く植え、隣の邑と交易すべし。さらに、新たなる水の源を求め、隣邑と共に使うよう」

三日後、ふたつの邑の長が出会い、飯豊を挟んで和解の儀式が行われた。つづいて祝宴が張られた。

祝宴が果てて後、飯豊と満智は再び旅立った。

「汝なれは」

満智が問うた。

「吾われの天文を信じたのか？」

「然り」

飯豊は、丈の高い満智を見上げ、微笑んだ。その澄んだ瞳から眼を逸らし、満智は苦い面もちをつくつた。

「もし、吾が誤っていたら、即ち、日照りがさらに続いていたら、汝は殺されていたかもしれぬ」

「そうか」

「誤った託宣を述べる巫女は殺される」

「吾は、巫女ではない」

「では何故に、地に臥して祈った」

「満智の天文に誤りはないと信じていた故。それに……」

ふと、飯豊は足を止めた。

「吾が邑では、疫病が多くのを死なしめた後、争いが起こった。傷つけあい、殺しあい、生き残った者も病で死んだ。吾が父も母も、兄も妹も……」

飯豊は俯いた。豊かな髪が貌を覆い、その面差しを隠した。

「争いは見たくない」

満智は、黒髪からかいま見える飯豊の哀しげな横貌に胸塞がれる思いをうち消すように、

冷ややかに言った。

「人が在れば、争いは起こる」

「争いは、鎮めればよい」

そう言い切り、満智に向けられた飯豊の貌は、はっとするほど明らかだった。

以後、飯豊と満智は、邑々をめぐり、さまざまな争いを鎮めた。争いの兆しを見るや、飯豊はまず双方の言い分に耳を傾けた。どれほど頑なな者も、不思議と飯豊には胸の裡

をさらした。ついで飯豊は、満智に意見を求めた後、独り神に祈る。祈りが終わった時、争いはきれいに片づいていた。

満智は、飯豊の驚くべき才に舌を巻き、ついで、これを生業とすることを思いついた。白布を求めて飯豊を巫女のように装い、笹丈と紅の帯で、その神々しさを強調した。霊験あらたかな巫女がいます、その噂を満智は、尾緒はひれをつけて流した。噂は噂を呼び、さまざまな邑から招かれるようになり、さまざまな財や食べ物、衣、そして女を満智は手に入れた。自らを利用して財を手に入れては女に貢いでしまふ満智を、飯豊は別に蔑むふうもなく、奇妙な二人連れは旅を重ねた。

旅を重ねるにつれ、奇妙な噂が広がった。

ある邑の諍いを鎮めた後の宴の席で、邑長がおずおずと満智に切り出した。

飯豊は、内乱で国を追われたさる王族の裔と聞いたが、まことであるか……。

満智は、上座で静かに供された川魚をむしって口に運ぶ飯豊に眼をやった。

たしかに、鄙の出としては、どことなく貴げな……。

急いでその思いをうち消しつつ、満智は意味ありげな笑みを浮かべた。邑人どもは、やはりそうであったか、と得心しつつ、頷きあった。

翌日、邑を出てから満智は、飯豊にそのことを告げた。飯豊は眼をわずかに見開いて、しばし満智を見つめた。その思い詰めた眼差しに、満智は胸の裡がざわめくのを押さえつつ、笑った。

「誰が言い出したかは知らぬが、汝を王族の裔とは、よくも言うたものだ」  
飯豊は無言で、しばし歩みを止め、中空に眼差しを漂わせた。

「何を考えている」

不安げに問う満智に、飯豊は口を開いた。

「吾の一族がかの邑に住み着いたのは、父の父の父の代、それまでは、いずくか東の国で、敬われ崇められる身であったと、母から聞いた」

「東の国の……」

「王族であったとは聞いていない」

飯豊は首を振り、微笑んだ。

「吾が祖が何者であろうとも、今は満智と二人、定めもない孤り身。それでよいではないか」

だが、噂はさらに噂を呼び、他ならぬ満智自ら、噂の広がりには棹をさした。ある邑の古老より、百年も前、ヤマトの国を開いた御真木の大王の弟が、兄と争って国を追われ、その子孫は行方知れずと聞き、

「まさか、かの巫女こそ、御真木の大王の弟の裔……」

と耳元で囁かれたときも、例によって意味ありげな笑みを浮かべるだけだった。

満智は知っていた。ひとびとは、血筋を尊ぶ。ヤマトほどの大国の大王家の血筋とあらば、ひとびとはさらに飯豊を崇め、満智はその余沢に預かることができる。

旦波の北なる高志の王からの使者が、飯豊と満智のもとを訪れたのは、それからほどなくであった。

馬蹄が轟き、邑の広場は、ものものしく武装した兵を引き連れた高志の王の使節一行と、それをこわごわ取り巻く邑人で埋め尽くされた。

邑長の家に泊まっていた飯豊は独り、使者の前に立った。満智は家の戸口で、人垣の間から広場の様子をうかがった。

使者は、飯豊を見るなり馬より降り、両手を組んで拝礼した。

「巫女よ」

髭面の使者は、声に威を込めて問うた。さほど老いてはいないが、枯れ木のような厳しい貌だちであった。

「汝はヤマトの大王家の彦湯皇子の三世の孫と聞いたは、まことか」

満智は、総身が冷たく縮んでゆくを感じた。国を治める者にとつて都合の悪い流言を放った巫者が処刑されるのを、その眼で見たことがあった。すぐにも逃げだしたくなるような恐怖を押さえつつ、満智はひそかに飯豊を見やった。

飯豊は、少し首を傾げて使者を見つめていたが、やがて口を開いた。

「高志の王は、吾が祖が何者なるかを問いに、汝をこの邑まで遣わしたわけではあるまい」  
使者は何か言おうとして、言葉に詰まった。飯豊はさらに決然と言った。

「高志の国に、争いや諍い、乱れの元があらば、吾は国志の王と民のために、神の声を聞き、告げることもできよう。吾がその任に相応しいか否かは、吾が祖ではなく、吾そのものを見極めよ」

「聞きしにまさる、慧き乙女である」

使者の背後より高笑いが洩れた。

一人の兵が馬よりおりて近寄ってきた。使者は膝を突いて拝礼した。

飯豊はまっすぐに、粗末な藤蔓の甲冑に身を固めたその男を見上げ、静かに口を開いた。

「高志の王なるか」

「然り」

息をひそめてなりゆきを見守っていた邑人どもが、いつせいに額を地につけた。

四十半ばか、上背はないが、ゆったりと幅が広く、穏やかな眼差しに胸まで届く顎髭。

王と呼ばれるに十分な威風であった。

「何故に、まず吾が祖を問わせた」

怯むことなく、まず問いを放った飯豊に、高志の王は微笑んだ。

「汝は、自らヤマトの大王家の裔と名乗ったことはないのであるう」

飯豊は応えず、微笑みを返した。

「噂とはそのようなもの」

高志の王は吹き、拝伏する邑人どもの間にあつて、腰をかがめ、狼狽えた面もちの満智

を見やり、微笑みをおさめて背を伸ばした。

「これよりすぐ、三国まで、来よ」

三国は、高志の王都のある地である。飯豊は躊躇わなかった。

「諾」

高志の王は踵を返して馬にまたがった。

「鹿虫！」

呼ばれて使者は、王に向き直った。

「吾はすぐに三国に戻る。汝は丁重に、巫女を案内せよ」

言うなり王は、馬首を返して鞭を当て、砂塵を巻き起こして駆け去った。教騎の兵が、その後に従った。

「巫女よ」

残った鹿虫は立ち上がり、王を見送る飯豊に言った。

「明朝、三国に向かう。今宵は支度を整え、ゆつくりと休め」

飯豊は眼を上げ、問うた。

「高志には何か、諍いが？」

「否」

鹿虫は首を振った。

「年来の諍いが鎮まろうとしている。しかし、ものごとは乱すより、鎮めるほうが難しい。

ひとつ間違えれば、より大きな乱れとなる」

静かにうなづく飯豊に、鹿虫は知らず知らず、言葉を重ねていた。

「故に王は、汝の補けを求めた。吾もまた、それを望む」

一月の後。

高志の南、且波の北なる国境い、山々に囲まれた小さな邑で、各々数十の兵を従えた領国の王が対峙した。

邑の広場に席が設えられ、敷かれた筵むしろに両王は向かい合って座し、その背後にそれぞれ数名の臣が控えた。

「高志の王よ」

まず口を開いたのは、且波の王だった。

雄大な体躯、白髪が目立つ髭だらけの巖のような貌、洞のような口から銅鑼どらを鳴らすような音声が放たれた。

「汝の背後に控える、その乙女は何者なるか」

且波の王の眼は、高志の臣に混じって座す、白装束の乙女を見据えていた。

高志の王は応えた。

「巫女である」

「巫女」

「これより交わす談合が、神意にかのうか否かを、定めさせる」

「高志の巫女に、神意を問うのか」

疑わしげな面もちの且波の王に、高志の王は穏やかに説いた。

「高志の巫女ではない。いずくより来たれるか、吾は知らぬ。さまざまな邑でさまざまに諍い争いを鎮め、民の暮らしを安らかならしめた。長年来争うてきた両国が和を結ぶ談合の場に待るに、相応しい者と見極めた故、そこにいる」

「待て待て」

且波の王は、ぶあつい掌を突き出して制した。

「その巫女のことならば、聞いたことがある。高志に、ヤマトの大王家なる彦湯皇子の三世の王孫にして、神の言を聞く乙女がいると」

飯豊の傍らに跪ひざまずく満智は、首をすくめた。且波まで噂は広がっていた。もし、和が結ばず、談合が不和に終われば、間違いなく殺される……。

高志の王は、振り返って飯豊を見た。飯豊は、静かに且波の王を見つめ、笑みを浮かべている。その笑みをどう受け取ったか、且波の王は手を打って大笑した。

「よくぞ、この席に隨身させたるものかな。汝が彦湯皇子三世の王孫とあれば、是非にも問いたいことがある」

且波の王は、肥かむどった身をひねって背後の臣に命じた。

「かの女どもを、ここへ！」



やがて、地響きを立てて、邑の外より広場へ、且波の兵どもが車輪のついた木の檻おりにを牽ひいてきた。檻のなかには、三つの人影があった。  
葛城韓媛かつらぎのからひめ、稗田阿礼ひえだのあれ、そして笹葉ささはであった。

一月ほど前、三人は比叡ひえの山を越え、且波に至った。里の女に身をやつし、密かに高志へ抜けるはずが、且波の王都に至ったとき、酒に酔って戯たわぶれかかってきた兵どもを、韓媛と笹葉が叩きのめしたことで、騒さわぎが起った。兵どもに囲まれた韓媛と笹葉は、なおも抵抗し、十余の兵が、腕を折られ、ふぐり玉を蹴り潰され、地に転がった。ついには百の弓を構えた兵に囲まれ、三人は降伏した。

「なんでも……」

且波の王は言った。

「あの若き乙女は、ヤマトの大王に討たれた葛城の一族だという。大王家の裔いひこを奉じて軍を興おこし、ヤマトに攻め入って一族の讐むごを果たそうと、高志に赴く途中であつたとか。捕われの身となつてもなお、吾に兵を興せと言ひ張はつてきかぬ。面白き女どもゆえ、今日まで生かしておいた」

「汝が父は、十七年前、ヤマトの者に討たれたのであつたな」

高志の王が静かに言った。檻のなかに端座たんざしていた稗田阿礼が、わずかに貌を動かした。

「然り。この乙女もそれを知つていて、ヤマトの大王家は、吾の仇でもあると、こう言い

募る。且庭が近く高志と和を結ぶと知るや、では、高志の兵も合わせれば、ヤマトは軽々と平らげられると」

且波の王は、腹を揺すつて笑つた。

「頼もしき女兵どもである。是非、且波に大將軍として迎えたい」

「且波の臣になど、ならぬ！」

檻のなかで、韓媛がわめいた。

「吾が望みは、葛城一族を悉く殺戮した大伴を滅ぼし、正統なる大王を迎え、ヤマトを安らかにし、葛城を再興することである」

高志の王は、ちらにと檻に眼をやり、且波の王に問うた。

「他の二人は何者か？」

「白髪の女はヤマトの史人ふひと。もう一人はその養い子だそうだ」

「ヤマトの史人か」

「然り。十七年前、ヤマトを追われ、手を切られ舌を切られ眼を潰され、それでもなお生きて、比叡の山に潜んでいたという」

高志の王は腕組みして黙り込んだ。且波の王は続けた。

「高志の王よ。汝が国は、外を攻めるとなれば、何人の兵を出せる」

「まず……五百」

「且波の兵を合わせれば、確かに千は越える。あの葛城の乙女は自ら兵を率いて東の二十

国を服属せしめた女將軍めのいくさのみ。ヤマトの地にも明るい。しかもヤマトは内乱うち続き、新たな大王が定まったばかり。討つには好機である。さらに、吾らが手を携えてヤマトを討てば……」

「結びし和は、さらに堅固になる……」

呟いた高志の王に、且波の王は陽気に和した。

「しかも、彦湯皇子三世の王孫を奉じて攻めるとなれば、名分も立つ」

高志の王は、且波の王の眼を見つめた。濃い眉が垂れ下がった小さな眼に浮かぶ気色に、必ずしも王が、飯豊が王孫であることを信じていないと悟れた。

ふと、王の背後で飯豊が立ち上がった。眼が大きく見開かれ、肩が上下に揺れ、息が荒い。白い頬が、赤く染まっている。

飯豊は、まっすぐに檻まで歩いた。檻を警護する矛を携えた兵どもは、且波の王を見た。

且波の王も、制するべきか否か戸惑ううちに、飯豊は檻の前に立ち、まっすぐに韓媛に對峙した。

訝しげに見つめ返す韓媛に、飯豊は口を開いた。

「ヤマトを討ち、汝が敵を滅ぼせば、汝の心は安らかなるか？」

「然り」

高ぶって応える韓媛に、飯豊は静かに問いを重ねた。

「それで、ヤマトの民は安らかなるか」

思わぬ問いに、韓媛は口を噤んだ。飯豊はさらに問うた。

「高志や且波の民は、安らかなるか」

「汝は何者か！」

応えられず、韓媛は叫んだ。

「何故、さようなことを吾に問う！」

「分からね故に……」

飯豊は眼を伏せ、応えた。

「問う……」

韓媛は押し黙った。

「葛城の乙女よ！」

且波の王が怒鳴った。

「その乙女こそ、汝が求めている彦湯皇子三世の王孫である」

韓媛は眼を見開き、檻の柵を握りしめた。

「まことか！ 汝はまことに彦湯皇子の王孫なるか！」

檻を破らんばかりに身を乗り出して叫ぶ韓媛に、飯豊は眼差しをあげ、応えた。

「吾が望むは、争い諍い、国の乱れが鎮まることのみ……」

「吾が問いに応えよ！」

「汝もまた……」

飯豊は檻から離れた。

「未だ、吾が問いに応えてはおらぬ」

韓媛は、口を噤んだ。

踵を返し、席に戻ってゆく飯豊の背後に、唳れ声しわがが響いた。振り向けば、稗田阿礼が檻のうちより、何か叫んでいる。叫びは言葉にならず、獣の咆哮にも似て、王も臣も兵も思わず身を引いた。

独り飯豊のみ、身じるぎもせず、阿礼を見つめた。

「女童めのわらべの巫女よ、阿礼の阿母おもは……」

笹葉が代わりに口を開いた。

「汝と談じたい、と言った」

「吾と？」

「然り。汝と二人のみで」

飯豊は振り返って高志の王を見た。高志の王はしばし考え、且波の王に向かって口を開いた。

「吾も、ヤマトの女どもの話をつまびらかに聞きたい」

「さもあらん」

且波の王はうなずいた。高志の王は続けた。

「されば、女どもを檻より出し、談合の席に加えては如何」

「女どもをか？」

「汝はすでに、ヤマトを攻める気でいよう」

且波の王は応えず、唇を歪めて笑った。

「ヤマトの大王は、吾が父の敵である」

「ならば、女どもは捕らわれ人ではなく、客として対するべきである」

高志の王は立ち上がった。

「もはや日も傾いている。談合は明日として、今宵は宴を開こう」

邑の広場は、喧騒に包まれていた。

高志の王が運んできた酒や肉があちこちに据えられ、盛大な篝火が、酔って朱に染まった兵どもの貌を照らした。

輪を作って坐す兵たちのなかから、高志人と且波人がかわるがわるの進み出て、各々の国の歌を謡い、大勢がそれに和した。且波の王は自ら剣舞を披瀝した。

そんななか、独り物憂げに押し黙っていたのは、葛城韓媛だった。

稗田阿礼は、飯豊と話を交わすため、笹葉を伴って邑長の家やに籠もった。韓媛はただ独りのヤマト人として広場に残された。時折、高志の王が声を懸けるが、韓媛は軽く眼差しで応えるだけであった。

酒杯を口に含み、焼いた山鳥を食いちぎりつつ、韓媛は苛立っていた。

あの十二歳の巫女が、果たしてまことに彦湯皇子の三世の王孫なるか否か、飯豊自らは明言せず、両王もまた、深く追求しようとはしない。

韓媛にとつて、ヤマト攻めは一族の復讐であったが、両王にとつては利を求めることに他ならない。ヤマト大王家の裔を奉じるなど、空虚な名分にすぎぬことを両王は承知している。さらに、戦を興すためにあたつて名分が重要なことも。従つて、両王は自ら進んで騙されることで、大きな利を得ようとしていた。

武を好む韓媛に、その機微は分からない。薄々と感じてはいても、頭のうちで筋立てて考える性は、韓媛にはない。ただただ、苛立たい。

稗田阿礼ならば、韓媛の苛立ちを言葉にして現してくれたであろうが、阿礼は飯豊とともに家の裡にある。飯豊がまことに王孫か否か確かめるのではなく、ただ、彼女が流れ歩いた邑の風土を知りたいためであるらしい。

ふと、韓媛の眼の隅に、邑の娘たちの肩を抱いて笑いさざめいていた満智が立ち上がり、広場に背を向け暗がりには歩いてゆくのが映った。娘たちが何か声をかけ、満智は少し振り向いて手を振った。

あれは確か、飯豊の下部……。

韓媛は静かに立ち上がり、そつと席を抜け出した。

邑長の家の一室に、飯豊は稗田阿礼と向き合っていた。

阿礼の手元に、砂を敷いた桶が置かれていた。阿礼が、手のない腕の先端を動かして砂に文字を書き、笹葉が声にして伝える。飯豊は、字が読めなかった。

飯豊は、自らがめぐり歩いた邑々で起こつた事どもを語り、阿礼は頷きつつ耳を傾け、笹葉は竹簡に書き記した。

飯豊が語り終えると、阿礼は、先の大王の代からうち続く、ヤマトの内乱を笹葉に語らせた。

「何故に……」

聞き終えて飯豊は、ため息をついた。

「さように相争う」

「争つて流された血が憎しみを呼び、また血を流し、新たな争いを産む」

「何を得ようとして、争う」

「力、富、誉れ、そして……」

笹葉は、阿礼が砂に書いた文字を読み上げた。

「平らかな和」

「和……？」

飯豊は首を傾げた。

「和を求めて争い、憎しみを呼び、また血を流すのか？」

阿礼は頷いた。

「稗田の史人よ」

飯豊は、眼を潤ませ、問うた。

「果たして、高志と且波はヤマトを討つべきか、吾は今宵、神意を問い、明日の朝、皆に伝えねばならない。その前に、汝の考えを聞きたい」

阿礼は、しばし考え、やがて桶に腕を差し入れた。笹葉は、桶を覗き込んで息を呑み、ゆっくりと読んだ。

「討つ……可し……」

それにしても……。

邑の外れの林のなかで放尿を終え、身繕いを整えつつ、満智は呟いた。

「まさか、軍いくさに随したがうことになるとはな……」

空を見上げた。灰色を帯びた黒雲が天を覆い、月も星も見えない。

「吾が天文も、今宵は使えぬか」

何とかなろう……。まさか飯豊を危険な戦さ場に出すはずはない。満智は、後方で飯豊の傍らに付き添っていれたい。負ければ、飯豊の手を引いて別の国に流れていくだけのこと。勝てば……飯豊はヤマトの大王となるかもしれない。そうなれば満智もまた……。

心が落ち着き、満智は貌を緩めた。

今宵はどの娘を抱くか……。思索しつつ広場に戻ろうとして歩み始めたとき、樹の後ろ

から黒い人影が飛び出した。同時に、凄まじい劇痛が、下腹部を襲った。

両手で股間を押さえてうずくまった彼を、冷ややかに見下ろしていたのは、葛城韓媛であった。

「何故に……戦えと……」

開くことのない阿礼の臉を凝視しつつ、飯豊はかすれた声で問うた。

「人は欲することしか聞かない」

笹葉が、桶を覗のぞきながら読んだ。

「汝が鎮めてきた人どもは、争い一つも争いを欲していなかった。争いを止める手だてを求め、その手だてを知らなかった。故に汝が言に耳を傾け、争いをやめた。然るに……」

飯豊の貌が悲しげに歪むのを見て、笹葉の声も乱れた。

「高志の王も且波の王も、ヤマトを討とうと欲している。故に、汝が彦湯皇子の王孫であることを欲している」

「では……」

飯豊は呻いた。

「軍は止められぬと……?」

阿礼は大きく頷いた。

「汝は、あの巫女の下部しもへであろう」  
全身を苛さいなむ激痛に、背を丸め、両手で己が身を庇いつつうずくまる満智を、韓媛は冷ややかに見下ろしていた。

「下部……ではない……」

急所に一撃を浴び、動けなくなったところを、脇腹、臍すね、尻、ありとあらゆるところを蹴られた。息をすることすら出来ず、やつと声を絞り出した。

「下部でなければ、何だ！」

何だろう……。満智はふと、飯豊との間柄を言い表す言葉が思い浮かばないことに気づいた。「友」という概念は、この時代にはない。

「兄……の如きものか……」

不意に口を突いて出た言葉に、満智はおかしくなった。笑みがこぼれた。

「兄だと？」

韓媛は眉根を擡しかめた。

「まさか、汝も彦湯皇子の王孫を名乗っているのではあるまいな」

満智は大笑した。弾けたように笑い転げた。

「まことの兄ではない、如きもの、と言うたではないか」

「史人よ……」

しばしの沈黙を破って、飯豊は問うた。

「汝は軍の起こることを欲するか」

稗田阿礼はしばし考え、こう砂に書いた。

「吾は記するのみ」

「兄ならば、兄でもよい」

笑い転げる満智の股間を、踵で踏みつけながら韓媛は言った。

満智は絶叫し、身をのけぞらせた。

「吾が知りたいのは、あの巫女が、まことに王孫なりや否や、である」

「頼む……」

満智は地に頬をつけ、つむった眼から涙を流しながら呻いた。

「ここ……だけは……」

「汝が、偽りなく応えれば、何もしない」

韓媛は、満智の耳をつかんだ。満智が悲鳴をあげた。

「応えなければ、ふぐり玉を潰す」

「たわけた女將軍だ」

満智はやつと眼を開け、呻いた。

「たわけ？」

睨みつける韓媛に、満智は笑みを浮かべた。

「女は子を産む者……。男の子胤を奪ってなんとする」  
「汝はただ」

韓媛は、満智の喉を突いた。満智は身を折って噎せた。

「問いに応えればいい」

「……諾」

満智は喉をさすりながら言った。

「……問いは何であった？ ふぐり玉を踏まれて、あまりの痛さに忘れてしまった」

「思い出させようか？」

韓媛はいきなり、満智の股間を掴んだ。

「ああ、飯豊が、王孫か否か、であったな」

慌ててわめく満智に、韓媛は思わず笑みをこぼしそうになり、唇を結んだ。

「もし、否と応えれば、汝は如何する」

「そのことを高志と且波の王に告げ、まことの王孫を捜す」

「では、飯豊はまことの王孫であると応えれば如何？」

「その証しを、見せよ」

「もし……」

飯豊は再び問うた。一度涙で赤らんだ眼は、乾きつつあった。

「吾が、まことの王孫ではないと皆に言えば、軍は止むか？」

阿礼はついと膝を進めた。手のない腕で、飯豊の頬を撫でた。涙の跡が、かすかに湿っていた。しばし、その箇所に触れ、後ずさって砂に字を書いた。

「一時は止む。しかし汝は殺される」

笹葉は強張った面もちで読んだ。

「しかる後、両王は別の名分を立て、ヤマトを攻める……」

「たとえ、飯豊が王孫であろうと」

満智はやっと半身を起こし、膝を折って座った。

「飯豊は軍を望まない」

「何故？」

「飯豊は、争い諍いを好まない」

満智は貌を上げ、韓媛を見つめた。

「吾が里は、十七年前、汝らヤマトの軍に焼かれた。吾が一族は悉く殺された。ヤマトの軍が帰った後も、国は乱れたまま、終わりなき争いが続き、邑々は廃れた。その話をする  
と、飯豊はいつも、泣く」

韓媛は、無言で満智を見下ろしていた。石のように動かぬその貌を、青白く月あかりが

照らしていた。

「飯豊の邑は、疫病で悉くが死んだ。飯豊は独り生き延びた。汝が一族を討たれたと言ったとき、飯豊が如何なる面もちであったかを、汝は知るまい」

韓媛は貌を背けた。

「飯豊は、今にも涙を流しそうだった」

韓媛の肩がびくりと震えた。満智は、韓媛から眼を逸らし、闇を見つめながら言った。

「汝は、ヤマトを討ち、その後を如何する気にいる？」

「後……？」

「汝が服属せしめた東の二十国、噂に聞けば、蝦夷ども皆、ヤマトの軍に抗い、多くの兵が殺された。兵一人殺される度に、邑が一つ焼かれた。邑を焼かれた蝦夷どもがまた、ヤマトの兵を襲う。東に留まるヤマトの兵は、その日の食にも事欠き、邑の蔵から掠めとり、掠めとられた邑の蝦夷がまた、ヤマトの兵を殺す……」

韓媛は無言で俯いた。

「攻めるは易い。兵の数が揃えば、滅ぼすも易い。だが、攻めた後を治めるは難い」

満智はよろよると立ち上がった。

「飯豊が王孫か否か、吾は知らぬ。だがあの乙女ならば、一つの国を平らかに治め得るよ  
うに思う」

「さらば……」

飯豊は意を決した面持ちで言った。

「高志と且波がヤマトを攻めても、吾が軍旅のうちになれば、互いに傷の浅いうちに、治める手だてもあると言うのだな」

阿礼は頷き、砂に字を書いた。

「万に一つは……」

「諾」

飯豊は短く言い放ち、しばし俯き、貌をあげ、笹葉を見た。

「笹葉は、如何思う」

「吾が？」

笹葉はまっすぐな飯豊の眼差しに当惑し、眼を逸らして阿礼を見た。阿礼は微笑んだ。

「吾は……わからぬ」

笹葉は阿礼の傍らの桶を見つめながら言った。

「ヤマトなど、滅びてしまえ……とも思う」

「何故？」

「ヤマトの兵に邑を焼かれ、親を殺された」

笹葉は、遠くを眺めるように、言った。

「ヤマトだけではない……」



呻くように言って、膝に貌を埋めた。

稗田阿礼が、笹葉に擦り寄り、肩を抱いた。

「吾は……」

飯豊が呟いた。

「ヤマトの国を開いた御真木の大王が弟、彦湯皇子が……」

阿礼と笹葉が、飯豊を見た。

「三世の王孫……」

翌朝。

邑長の家の前に、高志、且波の両王とその兵、葛城韓媛らが、列を整えて膝を突いていた。

家の扉が開き、真新しい巫女装束に、赤銅あかがねの甲冑を巻き、髪をきりりと結び、帯に剣を提さげた飯豊が現れた。

「神意なり」

凜と響く飯豊の声に、百に近い人々は、いつせいに額を地に着けた。

「千の兵を以て、ヤマトを討つべし」

拝礼する兵どもの、声にならぬざわめきを背に、飯豊は踵かかとを返して、家のうちへと戻った。

再び、扉が閉ざされた。

邑長の一族に混じって、満智が腕組みし、微笑みを浮かべて飯豊を迎えた。

だが、飯豊の眼は、満智を見ていなかった。邑長の裾を掴んでこわごわと彼女を見る、

五歳ほどの女童めわらこを見つめていた。

扉の向こうで、兵どものどよめき、慌ただしい足音、武具の鳴り響き、さまざまな音が  
邑じゅうを包む気配がした。

飯豊は、不意に貌を歪め、床にくずおれた。